

民藝派による昭和初期における朝鮮民藝調査に関する研究
——柳宗悦「全羅紀行」の検討をとおして——

Research on Korean Folk Crafts in the Early Showa Period by the Mingei Group
——Through Examination of Muneyoshi Yanagi's "Travel to Jeolla" ——

梶谷 崇 *

KAJIYA Takashi

Abstract

In 1936 and 1937, Muneyoshi Yanagi went to research Korean folk art with Kanjiro Kawai and Shoji Hamada in the northern part of the Korean Peninsula, Manchuria, and Jeolla Province. During this endeavor, they avoided urban areas and instead explored small villages that produced handicrafts. Their travel experiences are documented in "Travel to Korea" (Chosen no Tabi) and "Travel to Jeolla" (Zenra Kiko), which were published by Mingei magazine. Notably, these records have received little attention in previous research on Yanagi's thoughts. The relationship between Yanagi and Korean art has often been viewed from the perspective of a mutual cultural understanding, which is born out of sympathy for the Korean people—as typified by the Korean Folk Art Museum movement. However, these texts are valuable records that show his understanding of Korea after the Mingei movement. Therefore, in this research, I tried to analyze his discourse on Korean craftwork and society by focusing on these research trips; moreover, I examined his understanding of Korean crafts after the Mingei movement. The first thing Yanagi emphasizes on this trip is the timelessness of Korea; for him, it is a virtue that does not mean stagnation and retains its pre-modern purity. Additionally, he states that the beauty of Korean craftsmanship is created by the unity of nature and human beings. Here too, the "sickness" of modern society, which has relatively lost nature, is emphasized, and Korean crafts are evaluated for their healthiness. In these examples, his theory has a strong, antithetical aspect with regard to authority. In his early theory concerning Korean crafts, he also criticized the academic art history of Korea and relatively evaluated the beauty of Lee dynasty crafts. After the Mingei movement, he emphasized the purity and healthiness of Korean crafts through criticism of modern times. As such, through the Mingei movement, his aesthetic theory of Korea took on a new character of modern criticism.

1. はじめに

柳宗悦は大正初期の李朝磁器との出会いから独自の工芸美学および朝鮮美論を展開し、やがて民藝美学へと発展させていった。1916年には初めての朝鮮旅行を行い、浅川伯教・巧兄弟との出会い、交友を経て朝鮮工芸の美を追究し、朝鮮民族美術館設立運動を起こした。柳はこれらの運動を通して数多くの協力者と共鳴者を日本、朝鮮において得ていく。朝鮮工芸への開眼は、大正末期の木喰仏の発見につながり、柳は木喰研究のための日本各地を訪ね歩く調査旅行を通して、朝鮮工芸に見たような民衆的な工芸美が日本にもまだ残されていることに気づく。それは近代化される以前の伝統社会の中で生み出されるものであり、生産、流通、消費のプロセスにおいて近代化された産業主義に毒されていない無垢な美であった。柳はこうして大正末年、民藝美学を打ち立て、民藝運動を展開するに至る。

柳の朝鮮工芸への深い愛着は民藝運動期に至っても変わってない。雑誌『工藝』においても度々朝鮮の工芸を取り上げ、他の民藝と同様に評価している。

しばしば柳の朝鮮工芸論は民藝美学の原点として扱われる。確かに柳はそれまでのブレイクやホイットマン、後期印象派、ロダンなどの西洋美術への傾倒から李朝工芸に出会うことを通して、東洋の美や工芸に潜む美へその関心の対象を大きく変化させた。それなしに民藝美学へ辿り着くことは考えられないだろう。朝鮮工芸論は民藝美学成立の大前提であることは否定できない。

ところで柳宗悦は河井寛次郎、濱田庄司らと1936年、1937年の2度にわたって朝鮮民藝調査旅行を行っている。その記録として『民藝』誌上に掲載された「全羅紀行」等のテキストが残されているのだが、既存の柳宗悦および民藝研究においては、これらの

朝鮮旅行については全く触れられてこなかった。全集や解説類において解題程度の言及はあるものの、水尾比呂志『評伝柳宗悦』やその他論文において、「全羅紀行」について分析的に言及している論考は管見の及ぶ限り見出すことができない。

柳と朝鮮の関わりについてはもっぱら浅川兄弟との出会いや 3.1 運動への人道主義的な発言、1924 年の朝鮮民族美術館開館に至る一連の文化事業の実績からの評価に大きく偏っており、昭和の民藝運動以降の柳の朝鮮美への理解の仕方については注意が払われてこなかったといえる。したがって、この民藝調査や柳のテキストに着目し、既存研究の欠を補いたいというのが、本稿の目的である。

2. 朝鮮民藝調査

前述のとおり柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司の3名は1936年と1937年、いずれも5月に朝鮮を旅行し、朝鮮各地の民藝品を調査している。1936年10月に日本民藝館が開館し、民藝運動が一つのピークを迎えている時期であり、柳らも多忙を極めていた。あえてこの時期に1ヶ月弱かけて朝鮮を調査旅行する目的の一つは、日本民藝館の所蔵品の収集であった。

『工藝』第69号(1936年12月)は朝鮮を特集し、柳らの1936年の朝鮮旅行に関する記事を掲載している。柳らを現地京城で出迎えた土井濱一は「朝鮮新工藝を見るの記」⁽¹⁾と題した報告文において、柳ら「三氏が朝鮮の新しい民藝を求めに渡鮮され」と述べ、柳らが朝鮮北部から満州へも移動し、京城に戻ってすぐにまた平壤まで買い出しに向かったといった慌ただしい旅行をしていたことを報告している。

土井濱一は朝鮮工藝会の主要メンバーの一人であった。朝鮮工藝会とは、浅川伯教から手ほどきを受けながら、朝鮮民藝の研究や収集をしていた在京城日本人団体である。土井は「『工藝』に毎号出る挿絵に依り、内地の民藝品を見ては、是れと類似の物、又同じ作行きの物が、朝鮮にも相当ある事を知った」とし民藝運動に啓発されたと述べつつ、「古い物に多くの興味を持ち過ぎてゐる」と振り返り、「柳さん達が今度購はれた物を見て、自分達の興味は非常に唆られた。新しい物への智識が開拓された。」と述べている。柳らの旅行の目的が新しい民藝の調査であったことや、在朝鮮の民藝派の人々であっても朝鮮の古いものがまだ関心の対象であったことが窺える述懐である。

日本民藝館は民藝美という新しい美の基準を人々に示すための展示場であり、柳はそれによってこれからの新しい制作に結びつくべきものと考えていた。したがって、古物ばかりではなく、今現在制作されている民衆的な日用品にも目を向けていた。日本民藝館は開館直後から「新作民藝展」を開催しており、彼らの理念を早速実行に移している。したがって、この民藝調査は古物発見の旅ではなく、当時実際に市井で作られ、売られ、使用されている物を求めたものであった。

『工藝』第69号には、柳、河井、濱田の連名による「朝鮮の旅」という関連記事が掲載されている。「朝鮮の旅」は、戦後『今も続く朝鮮の工藝』⁽²⁾に後述する「全羅紀行」などととも「朝鮮の風物」と改題されて収録されるが、「後記」によるとこの一文は「主に河井が負ふた」と記されている。連名であることから3名の共通の認識や考察が反映されていると考えられる。「朝鮮の旅」の内容は、彼らの旅の途上の見聞を断片的に書き留めたものである。調査先の平壤や満州の場所性を特定しない叙景詩風の文体である。たとえば、冒頭付近の一節は、

河が流れる。流れてゐる。ゆっくり流れてゐる。

青空には白雲浮び、鍋鶴は高く舞ひ上る。嘗ての焼物に染付けられた模様が、千年を経てこゝには未だにまき散らされたまゝである。⁽³⁾

といった具合で、描かれる朝鮮の風物はそれぞれ印象的である。河の流れや鶴の舞う姿に焼物に描かれた紋様のイメージを重ね合わせているところに3名の感性が反映されている。というのも、この引用箇所において千年前の染付紋様が眼前に広がっているという記述がなされているわけだが、この悠久性とも呼ぶべき時間の超越を朝鮮の風物と焼き物を重ね合わせるロマンティズムが彼らの常套句であるからだ。同文の末尾付近には次のような一節も見える。

朝鮮には時間がない。昔も今も一つの繋がりで、歴史にさしたる移りが見えない。だから今の朝鮮を知れば、昔の朝鮮が見える。不思議なことには考古学が現在の生活や品物で一番よく学べる。だがこの事実から朝鮮の歴史には進歩がないと考へるなら皮相な見方である。人間として保たねばならぬ幾多のものを失った吾々こそ、或る

点では却って後れて了ったとも云へよう。吾々の抱いてゐる「進歩」といふ自負は、朝鮮に来ると力がない。⁽³⁾

悠久性は変化がないことを結論づけ、したがって現在の生活や品物はそのまま考古学的価値を持つということになる。柳はのちに『今も続く朝鮮の工藝』を編むにあたり、「今の朝鮮」という一文を冒頭に新たに書き下ろしているが、そこで「朝鮮の考古学は、当然考現学の上に築かれねばならない。之ほど幸な考古学があらうか」と述べている。

そしてその悠久性は進歩がない、停滞ということの意味しない。それは「人間として保たねばならぬ幾多のもの」を保っているという価値なのであり、相対的に自分たちこそ退歩に陥っていると批判する。

3. 「全羅紀行」

1937 年 5 月の民藝調査は半島南西部の全羅道地域が対象であった。その記録は『民藝』82 号（1938 年 3 月発行）に掲載されている。そのうちの一つ「全羅紀行」は「朝鮮の旅」同様、3 名の連名で記されているが、『今も続く朝鮮の工藝』「後記」によれば主に柳が執筆したという。

この旅では、朝鮮工芸会の濱口良光と土井濱一も釜山から同行している。全羅道が調査対象となった背景は、1936 年の調査後、柳は濱口、土井らに全羅道の民藝調査を委託していたが、対象地の洪水被害のため計画を断念したという経緯がある。これらの事情については前出「朝鮮新工藝を見るの記」に記載されている。

また柳は『民藝』82 号の巻末「雑録」において「特に朝鮮工藝発育の中心地である全羅道に一步も入らずに終ったことは何より心残り」であり、「幸いにも一年が過ぎて、同じ 5 月同じ吾々三人の者は、其の全羅南北道に旬日の調査を行うことができた」と述べているとおり、全羅道が彼らにとって調査の空白地帯であったことも背景にあった。

もう一つ注意しておくべき点は、「雑録」において、「この調査が可能となったのは、その経済的方面を負はれた『高島屋』及『たくみ工藝店』の援助による。（中略）旅で集め得た品物は皆今回『たくみ』の主催で高島屋で展覧されることになった」とも述べており、この旅行が買い出し旅行を兼ねていたということである。事実東京高島屋は 1938 年 4 月 1 日か

ら 6 日まで「現代朝鮮民藝品展」を開催している。柳は展覧会の趣旨文において、朝鮮土産として売られている多くのものが日本人経営の企業によって生産されていると指摘しつつ、「朝鮮人が朝鮮人の為に作るものは大變に違ふ。美しさに本質的な区別がある。今迄さう云ふものが本当に紹介されたことはなかった。これ故此の会は最初の大きな企てである」と述べる。柳はこの企画を通して、より朝鮮への理解が深まることを期待しているのだが、同時にコマーシャルズムの一端を担おうとすることを隠してはいない。むしろ、「全羅紀行」の末尾において、朝鮮においても朝鮮固有のものを売る店が減少し、日本のものに置き換わっていく趨勢を由々しきこととした上で、

想ふに二つの道からこの傾きを取戻すことが出来よう。一つは朝鮮の人達の自覚である。固有の品物がどんなによいかをよく知ることである。二つには吾々がそれを進んで紹介することである。そのよさを語ることである。恐らく多くの顧客が日本にも待ってゐるであらう。私達はその役を勤めたいばかりにこの旅を企てたのである。

⁽⁴⁾

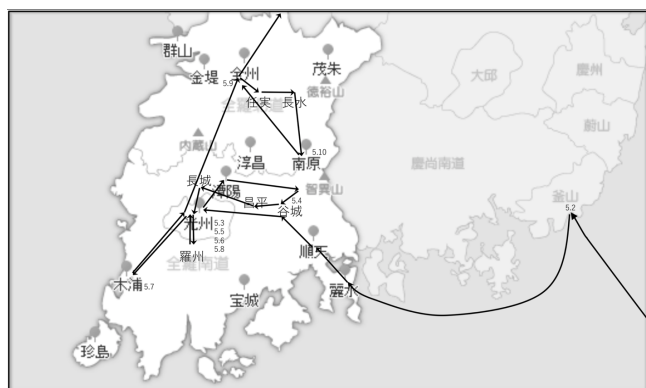
と旅の目的を明かしている。伝統工芸が近代化の中で徐々に衰退していくのは日本も朝鮮も共通の現象である。民藝運動自体そういった近代化に抗う文化運動であったわけだから、朝鮮の工芸についても同様の啓蒙活動を行なっていくことになる。その際、朝鮮工芸もまた、たくみ工藝店および高島屋による商業活動の中に取り込まれていることから理解できるように、朝鮮工芸の良さを知ってもらうという彼らの啓蒙活動は、とりもなおさず全羅道で流通していた産品を民藝運動の商圈に取り込むという事態を招来する。朝鮮文化への理解が進み、日本にも多くの顧客が現れることになるが、変化のない悠久性の中で過ごしてきたはずの朝鮮工芸、工人たちの生活や経済活動に結果として変化をもたらしたはずである。ここに民藝運動の一つのジレンマが垣間見られる。

「全羅紀行」は日程ごとにその日の訪問先、移動手段、そこで彼らが見た光景や接した人々とのやりとりなどが詳細に記録されており、この点に印象記風の「朝鮮の旅」との差異が見られる。「全羅紀行」の記述から彼らの旅程を整理すると表 1 のようにな

る. 以下, 旅程から読み取れる旅の特徴を整理してみる.

表 1 1937 年における旅程

日程	行程（二重下線は人名）
5月2日	柳玄悦、 <u>河井寛次郎</u> 、 <u>濱田庄司</u> 一行、釜山・上陸（ <u>瀧口玄光</u> 、 <u>土井清一</u> と合流） <u>下江藤平宅</u> （朝鮮反日運動の収集家）を訪問→陳列所見学、市場→（海路・船中泊）
5月3日	早朝 <u>睡水一順天</u> （道庁の自動車、案内役の <u>孫盛道</u> と合流）、郡下景盛道に面会、呉氏の案内で <u>塗西宅</u> を見学→谷城、郡役所の <u>羅本植</u> に迎えらる。→竹谷道下汗里窯場を発見、市場→ <u>光州</u> 、 <u>松本知事</u> 主催の歓迎会（内務部長、府尹、湖南銀行頭取 <u>玄盛</u> らの歓迎を受ける）→ <u>光州治</u> （泉屋旅館）
5月4日	<u>光州</u> →潭陽、竹細工の村（櫛を作る作家を見学、温泉部屋に朝鮮着物を着て作業をする3人の女性＝「唐時代の絵としてより以外に受け取れない」）→智異山華嚴寺、木工漆器を見る→ <u>谷城治</u> （谷城館）
5月5日	谷城→梧谷梧陽里、面長安吉善宅訪問、村の美しさに感嘆する→竹谷道下汗里窯場見学（焼物紙幣製造を発注）→梧木、市場見学「（南嶺の地産）＝「南嶺以前の日生活」として賞賛）→長城、紙業地、紙業組合理事 <u>李廷基</u> の案内で作業場を見学→ <u>李致愚</u> 宅訪問、款待を受ける→緋り居屋路で見かけた白磁に惹かれる（五百個発注）→ <u>光州治</u> （泉屋旅館）
5月6日	<u>光州</u> →羅州、羅州殿の名工、 <u>李鑄鑪</u> の工法を見学→ <u>東山</u> → <u>南平</u> 、市場を見学→ <u>光州</u> 、 <u>松本知事</u> により、柳らを囲む内鮮人の座談会が開催される。「朝鮮人に朝鮮の品に自覚を持つこと、為政者にはそれを尊重し生長させる任務があること」を主張→ <u>光州</u>
5月7日	<u>光州</u> 、大市日（大量の民藝品を市場。市場の近代化を嘆く）、昼食玄盛館へ招待、 <u>松本知事</u> 同席。→ <u>瀧口玄光</u> 帰城→ <u>羅州</u> 、市場（古い面影を賞賛。いくつかの民藝品を購入）→ <u>木浦</u> 、鬱陵山の風光を賞賛→ <u>木浦治</u>
5月8日	木浦、公設市場を見学（木工品、竹工品、陶器等を購入）→昼食、府尹 <u>増田道義</u> から饗応を受ける。増田氏は著作から柳を知る。）→多待面、市場見学、多待木器館を購入→ <u>光州治</u>
5月9日	<u>光州</u> →一經里、市場見学、案内役の <u>孫盛道</u> と別れる→（鉄道）→全州、商工奨励館（館長 <u>高橋氏</u> の好意で見学）→全州治（銀座）
5月10日	全州、道庁を訪問（ <u>松本光州知事</u> の紹介により、 <u>短知事</u> 、 <u>金産業課長</u> に面会、全羅北道内への移動のた自動車と案内役（ <u>朴鍾植</u> ）の提供を受ける。 <u>朴鍾植</u> は柳の講義の受講者で、著作の愛読者であった。）→途中、楳を遣く仕事場を発見し見学→任安、市場見学→ <u>長湍</u> （石器で有名）、郡守 <u>荻岡道面</u> 会→ <u>原南治</u> （菊水旅館）
5月11日	南原→雲峰（山内面）、木器、刺物で有名な、仕事場見学→立石里、実相寺訪問→全州、市場見学（有り余るほどの賣い物）→（鉄道）→京城
5月12日～16日	京城滞連（京城ホテル） 日本の物や日本から輸入された朝鮮産のものばかり売られる現状を嘆く。また京城で作られたものでも日本人が経営するものに入っていると、批判。



「全羅紀行」より筆者作成

1937年5月2日に釜山に上陸した柳、河井、濱田の3名は朝鮮工藝会の濱口、土井と合流、翌3日には海路麗水へ向かい、その後現地ガイド付き、道庁の公用車を使用しての調査となった。光州や全州、木浦といった地方都市を宿泊拠点としながら全羅南北道の工芸村を巡り歩いている。朝鮮工藝会のメンバーが視察先を準備したものと考えられる。旅行開始時点で視察先や特産品がほぼ決定しており、主な民藝産地を訪問し大量の品物を購入している。未発見の産品を求め歩くというよりは、買い出し旅行の性格が強いように思われる。行く先々の地元有力者や行政関係者とも頻繁に面会しており、この点でも

よく計画された旅程であることが推察される。

その一方で、偶然の発見による旅程の変更も行っている。5月3日に移動中に発見した竹谷面下汗里窯に魅せられた彼らは、翌々日に再度同地を訪れて見学をしているが、これは当初の予定にはなかったもののようである。3日、5日、6日が光州泊であり、4日だけ谷城泊となっているから、急遽1日旅程を変更したことも想像される。記述では3日に偶然同窯を発見した一行が思わず歓声をあげたというほどの美しい村であったという。「部落は山裏の斜面に添ふて素晴らしい配置を見せる。こんなにも自然の一部になり切ってゐる立て方も少ないであらう。人と自然とがこゝでは一つなのである。(中略)其の暮らしぶりは仕事をどうしても醜くさせない」として絶賛している。ただ当日は谷城の市日であることから窯場訪問は断念している。夕方光州に移動し、知事主催歓迎会があったというから、そういった予定も行程を自由にさせなかった理由の一つだろう。

二日後一行は谷城近郊の梧谷面梧枝里を訪れている。柳らは梧枝里において朝鮮美の謎を解き明かすインスピレーションを得たようである。

五月五日、谷城の城外数里にある梧谷面梧枝里を訪ふ。こゝを態々訪ねたのは去る三日この村を過ぎて、その美しさに心をいたく惹かれたからである。(中略) 梧枝里は裕福な村と見える。どの家も相当に大きく、皆一様に花崗岩の玉石で築いた塙を繞らしてゐる。小道はこの石塙の間に挟まれて、野川が自由に流れてゐるやうに曲がりくねり、交り合つて果てしなく吾々を歩み楽しませる。塙の上からは枝が垂れ、春のこととて花が咲き乱れる。(中略) 自然を友として暮す日々、衛生以前の生活、健康を事としない健康、是こそは朝鮮の品物のあの不思議な謎を解いてくれる鍵ではないのか。美しさが何か遠い奥から来てゐる。手だけの仕事でもなく頭だけの仕事でもない。もっと別な泉にまで遡らざば、正体を掴むことは出来ないであらう。朝鮮の美しさは浅い美しさではない。(4)

まるで桃源郷に迷い込んだかのような美しく平和な村落の描写である。自然と人が一体となった彼らの生活そのものの奥の方から美が生み出されてくると柳は捉えている。

この村の写真が『民藝』同号に挿絵として収録さ

れているが、柳はそれについて、

どの家もどの家も石をはめこんだ土塀に囲まれ、何のまじりけもない昔乍らの朝鮮の姿である。(中略)之ほど美しい村は一寸他にないからである。こゝで吾々は路地に佇み、家々を見、住むでゐる人達に逢ひ、使つてゐる器物を時を忘れて眺めた。⁽⁵⁾

と解説している。さらにもう一つの理想郷である下汗里窯についても以下のように解説する。

吾々はこんなにもまじりけのない仕事場を見たことがない。こゝで朝鮮の朝鮮に逢へる。(中略)恐らくこんな窯場は遠い高麗のそれと少しも変るところが無いであらう。何もかも昔のままだと思へる。而もこゝの歴史は窯を開いてより僅か四十年だといふから驚く。朝鮮では時間が流れないやうにさへ思へる。だから昔のものゝやうな品が今も生れる。⁽⁵⁾

どちらにおいても、高麗の時代から時間が流れていない、いわば悠久性が語られる。その悠久性はさらに「まじりけのない」純粋性に結び付けられる。

悠久性は民藝派の間では常套的な認識である。柳らの朝鮮調査に先立ち昭和初年代に谷城の窯場に入り、作陶をしていた浅川伯教も「河口に沿った街道には古風な家々があって、我国の茶室のような素朴な家が次々と点在して居る。「東路の埴生の小屋」と詠じた我が平安時代の東海道を思わせる」⁽⁶⁾と述べている。浅川の場合は日本の平安時代の光景とも重ね合わせ、日本と対比することで朝鮮の悠久性がより強調されることになる。

柳の場合は 1931 年に発表された「北九州の窯を見る」において大分県日田の山中にある小鹿田焼の窯について朝鮮に触れつつ以下のように述べる。

あの慶長頃から元禄にかけて旺盛を極めた朝鮮系の焼物が、今日殆ど煙滅し去った時、ひとりこの窯ばかりは伝統をつぎけて今も盛んに焼いているからである。(中略)窯は始まって以来変らない。同じものを同じ形を釉がけを今もつぎけてゐる。(中略)この窯には時代が無いのだと云った方が早い。思ひやうによつては時代遅れともいはれよう、だが一つだけ不思議なことは、最

も進んだ今の時代が作るものより、兎も角美しいところがある。⁽⁷⁾

柳は薩摩焼苗代川についても同様に「今は三百余年の昔文禄の役後、一と群の鮮人達がつれられて来て、窯は此の苗代川に卜した。累代の墓碑が南に面して日光を浴み乍ら今も建つてゐるから、こゝが始めから定住の地だった事が分る」⁽⁸⁾という記述を残し、生み出される民藝の背景に朝鮮陶工とその伝統を見ている。

中世において日本にも朝鮮にも、彼らにとっての美の理想郷が遍在していたものが、時代の変化とともに日本はそれを失ってしまったのであり、残されているとすれば小鹿田や苗代川のようなかつて朝鮮人陶工が移住し、他との交通が限定されたような地域にある。そこに残存する悠久性と純粋性が、生み出されるものの美を保証していると見ている。谷城と同じ原理が日本ではわずかにそういった奥山に残されている。民藝の美はこのような理想郷から生み出される、とするのである。

4. 病気のメタファーと朝鮮の健康性

悠久な理想郷の純粋性を日本は失ってしまったという。その原因を柳は「病気」のメタファーによって表現している。

現地で大量に商品を購入した際にとっさに代金の計算ができない現地の工人を見て、「沢山の金なんか扱ふ必要のない生活、算用の厳しくない暮らし、こんな境地が何かを齎すのは当然ではないのか。品物の美しさを眺めて因って起る所の遠いのを想ふ。吾々には何かの病気が宿るのではないか」⁽⁴⁾と柳は自らを省みる。

また谷城の後、長城へ向かう途中、昌平の市日に立ち寄り、そこで売られているホンオフエに注目する。ホンオフエとは赤エイの発酵食品でアンモニアの強烈な臭気で知られる全羅道の伝統食品である。柳は市で売られるホンオフエを見て、以下のように記述する。

鼻を衝くのはうれかゝった赤鱈の猛臭である。

(中略)吾々には手の出しかねる食物。だがこゝに住む人達はやはり病菌以前の生活を営むと見える。半腐の肉のうまさを恐れるのは、吾々に病気があからずではないか。こゝでも亦濁らない歴史以前の生活の強みを見せつけられる。吾々

は余りに潔癖になりすぎてゐる。潔癖にしなければならぬ生活に陥つてゐる。⁽⁴⁾

近代化や産業化によって大量の製品を売り捌く資本主義経済の中で生きる柳ら日本人からみて「沢山の金」を扱う必要のない生活は「病氣」のない「健康」な生活に見える。また赤鯔の塩漬けを食べられないのは近代化によって衛生化が進んでしまったが故であり、衛生概念のない生活に「強さ」を見ている。「潔癖」でなければ生きられないわれわれ日本人は自然から離れた「病氣」を負った存在であり、逆に朝鮮の集落や市で生活する人々は自然と調和した「健康」な存在として相対的に浮上する。

大正後期、民藝論以前の柳の朝鮮工芸論においては朝鮮の美の特質を「悲哀の美」のような民族の歴史を反映した美として捉えていた。だが柳は民藝運動を展開する中で「健康の美」という概念を打ち出していく。水津智博⁽⁹⁾は柳の健康概念を整理した上で、「柳の民藝論における『健康の美』とは、民藝運動の展開とともに深化した『美の標準』であり、常に具体的な『不健康なもの』『病的なもの』の事例との比較を通じて明確化された美概念だった」と指摘するとおり、「全羅紀行」においても病氣／健康の二項図式は踏襲されている。

その一方で、柳が朝鮮の健康美を強調する場合に、衛生概念を持ち出していることも併せて考える必要がある。5月7日、柳らは夕方木浦に移動するが、当地の儒達山の斜面にきのこが生い茂るように立っている朝鮮民家の光景を見て、「人と自然とがここでは互いに抱き合う」と述べ、金剛山にも劣らない風光であると、自然との調和を讃美している。

翌日8日、木浦の府尹である松田道義より昼食の応響を受け、柳は松田と面識はないものの、松田が柳の著作の読者であったことから「旧知の友」のように語りあったというが、そこで彼らは以下のような応答を交わしている。

同氏（松田）の話では木浦府今日の発展が、朝鮮人を段々儒達山の上に追ひ上げて行ったが、保健状態は劣悪だし、山の眺望が為に壊され木浦中の困りものとして屢々問題に上るといふ。だが吾々から見ると、美しい民家の群に飾られた儒達山こそは、木浦随一の風物である。私達はその保存が木浦市民に課せられた一つの名誉ある義務であるのを強く述べた。⁽⁴⁾

為政者の立場から松田は、儒達山に住む朝鮮人たちの生活を公衆衛生の観点から問題視している。柳はすでに見た通り、近代化された日本人こそ潔癖にすぎ、自然との調和を失った病に冒されている存在であるとみる。この点両者は完全にすれ違っている。

衛生概念は日本においても近代以降西洋医学の受容とともに社会に浸透していくが、植民地朝鮮においては宗主国である日本主導で行われていった。鈴木哲造⁽¹⁰⁾は日本の植民地統治における公衆衛生政策が、近代化の肯定的側面を持ちつつも、「近代科学に裏打ちされた医療・公衆衛生という規範が『文明＝清潔』との対照において、『不潔』に対する差別的な眼差しを生み出し、『文明』をもって改良すべき対象と指定することにより、植民地支配を正当化する論理として作用していた」と指摘している。また朝鮮については松本武祝⁽¹¹⁾が、農村部において展開された総督府や地方行政機関、民間団体による衛生事業を、細かな事例、データをもとに明らかにしている。それによると医療機関や医師は都市部に集中し、高額な医療費もあって農村部は医療機関から疎外されており、それに変わり衛生概念の啓蒙事業が行われた。その結果それらの事業を通して伝達された科学的知識によって日常生活の「規律化」が促された、ということを指摘している。

一見、「旧知の友」のように語り合った二人であるが、彼らの間には以上のような植民地政策としての衛生概念のコンテクストが横たわり、両者の疎通を妨げている。松田にとって劣悪な保健状態である木浦の朝鮮人の生活は、柳の目には自然との調和を得た極めて「健康」的な美しい生活に映っていた。

5. アンチテーゼとしての朝鮮工芸

朝鮮の健康性を強調し日本の「病氣」を際立たせることで新たな価値観への理解を求めていく、近代文化に対するアンチテーゼを提示していく、というのが民藝論の言説戦略である。この戦略は民藝運動以前の柳の著作にはすでに見られるものでもある。たとえば「革命の画家」や『ウィリアム・ブレイク』は既存の価値観を転倒させる天才として後期印象派画家やウィリアム・ブレイクを取り上げているし、同様に李朝陶磁器についても既存のアカデミズム批判という性格が強い。

柳の初めの朝鮮論と位置付けられる「朝鮮人を想ふ」⁽¹²⁾は1919年の3.1運動に対する日本政府批判

であったが、そこで「朝鮮に就いて経験あり知識ある人々の思想が殆ど何等の賢さもなく深みもなく又温みもない」と批判している。ここでの批判の対象は為政者ばかりでなく、学識者も含まれる。具体的には柳がしばしば言及する関野貞が代表される。関野は、東京帝国大学の教授。朝鮮総督府の囑託により朝鮮古蹟調査を行い、朝鮮古建築・古美術の研究調査および文化財行政に従事した。関野の朝鮮美術史観は美術雑誌や『朝鮮美術史』『朝鮮の建築と芸術』『朝鮮古蹟図譜』などの著作を通して広く流布し、当時の朝鮮美術史観は関野によるところが大きい。⁽¹³⁾ 関野は朝鮮美術史を大きく新羅、高麗、李朝の3期に分け、新羅を「芸術上の黄金時代」として日本の奈良文化にも影響を与えた時代とし、高麗は「多少固有の特質」を持ちつつも、「陶器の外、前時代のものに比すれば、意匠技工共に大に下れる」、そして李朝は「技巧愈々退くの奇観を呈せり、是畢竟国勢の隆替に随ひ、時代精神の弛緩、推移の結果固より己むを得ざるの致す所なり」⁽¹⁴⁾ として国力の低下と共に芸術文化の退廃期と見做している。

関野以前、朝鮮を調査した最も古い考古学者といわれる八木槌三郎も「高麗に入ては金仏、珠玉、鏡鑑、焼物等悉く進歩の度を示す可きもの続々これあり、李朝に至りては其初世こそ斯る技術も保たれしならんが其後は反て衰頹せしものゝ如し」として、同様に高麗、李朝と漸次芸術文化が衰頹していくいわば衰頹史観を共有している。^(15, 16)

それに対し柳は「李朝陶磁器の特質」において以下のように述べている。

一般の趨勢を見ると、時代が下降すると共に技巧が複雑の度を増している。それは東西を問はず避け難い結果であった。云ひ換へれば、人は自然を離れて作為に芸術を託そうとしたのである。(中略)かゝる一般の傾向によれば、下降した末期の陶磁器に於ても此欠点が見られねばならぬ。然るに吾々は実に興味深い芸術上の異例を李朝の窯芸に於いて見る事ができる。すでに叙述した様にその美は単純化への復帰であった。

(中略) いかにも陶工は無心に自然に一つの器を造ったであろう。(中略) 自然への無心な信頼、之こそは末期の芸術における驚くべき異例ではないか。私たちはそこに美が何ものであるかを学ぶ事ができる。⁽¹⁷⁾

関野らに見られた衰頹史観において最も低く評価される李朝を柳は逆に「芸術史上の異例」として高く評価する。一般の歴史の趨勢では、時代と共に自然を離れ技巧や作為に走るが、柳によれば李朝はそれとは逆に「自然」への復帰を達成している。既存のアカデミズム言説へのアンチテーゼとして「自然」への無心の信頼から生み出される異例としての李朝工芸の美を示すことで、独自の美学を打ち立てているのである。

6. おわりに

「自然」との一体性の強調は後の「全羅紀行」にも見られる朝鮮工芸の特性であった。だが、柳は「李朝陶磁器の特質」を書いた時点では朝鮮の民藝村の視察等はほとんど行っていない。むしろ柳が見ているのは陶磁器そのものから読み取れる単純化の美である。たとえば模様の「筆致」から陶工の「自然への無心な信頼」を読み取っている。ここで柳がいう「自然」とは無作為という意味である。

筆者はかつて柳が自然との一体化を神秘主義的な営みとして捉えていることを指摘した。⁽¹⁸⁾ 柳はエマソンやブレイクの影響を受けつつ、汎神論的な自然観を抱いていた。そして無心に「恍惚」状態で制作を行う工人の姿を宗教者の神秘体験に準え、神と一体化した工人が生み出す陶磁器に自然な美が宿るとした。この宗教者＝工人というコンセプトは民藝運動にも通底している。柳にとっては美の問題は抽象的な宗教哲学の一部であり、柳はそれと具体的な陶磁器の美の原理の一致を目指していた。

こうして見るならば、「全羅紀行」において朝鮮人の工芸集落の生活に自然との一体性をみる視点は、むしろ現実を目の当たりにして得られたものというよりは、あらかじめ柳の中にあった社会のあるべき姿、すなわち柳のユートピアの理念を投影したものとも言える。柳にとって、目の前に展開される美しい工芸品とそれを制作する近代化されない工人たちの姿はまさに彼の哲学を裏付ける格好の事例として目に映ったことだろう。

ただし、そこに当事者である朝鮮人の声は反映されていない。それは当然で、民藝論においては制作者は自分がなぜ美しいものを生み出すことができるのか理解し得ない人々、美がなんであるかわからずに美しいものを生み出す人々でもあるからである。当事者不在の非対称な関係性において美の神秘が語られるのが民藝論の特質でもある。後に柳は沖

縄方言論争において沖縄県側から、柳の方言擁護論を批判されることになるが、朝鮮においても同様の構図を読み取ることができる。木浦の山麓に住まう人々の不衛生な状況を、自然と一体化した健康な生活と柳は捉えていたが、それを当事者がどう考えていたか、柳はどのように理解していただろうか。同様に柳が絶賛した朝鮮の民藝村の前近代的な生活を、そこで生きる人々がどう感じていたのかも、「全羅紀行」からは読み取ることができない。

柳の弟子の一人で染色家・民藝運動家の外村吉之介は戦後、朝鮮を旅した際、かつて見られた「あの高麗の焼物のように優しい線と、李朝のもののように寂かな美しさを湛えていた草屋根の姿は、さがしてもほとんど見つから」ず、韓国農家工芸品開発本部の要路の人と以下のようなやり取りがあったと報告している。

私は、「あの美しい草屋根をセメント瓦にするような面目一新は歴史を汚し、国を辱めるものではありませんか」といった。すると「日本やアメリカは文明がよく開けていて、古い格とか渋さがよく顧みられていますけれども、韓国では今まず文明に開発してかからねばなりません」という応答であった。⁽¹⁹⁾

「全羅紀行」において言葉を発することのなかった朝鮮人からの応答がここでは見られる。朝鮮の風景に民藝ユートピアを幻視しようとする民藝派の欲望は、ユートピアに生きる人々に理解され受け入れられるとは限らないのである。

以上、本稿において「全羅紀行」を中心に分析を行ってきた。民藝運動以前の理念的な朝鮮工芸論において形成されていた李朝工芸＝自然美という概念が、民藝運動の健康美と結びつき、1930年代の朝鮮民藝調査において実際に目の当たりにした民藝集落に対してその理想像を当てはめていくという経過を辿ったと結論づけられる。「全羅紀行」などの旅行記は彼らの理念が現実に対応されることを『工藝』読者に示すことを目指したものと言えるが、それは民藝派内部におけるユートピアに過ぎないものでもある。上述の外村の記述はその限界を如実に示している。

参考文献

(1) 土井濱一：朝鮮新工藝を見るの記，工藝，

69, 1936年12月

- (2) 柳宗悦：今も続く朝鮮の工藝，私家版，1947
- (3) 柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司：朝鮮の旅，工藝，69, 1936年12月
- (4) 柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司：全羅紀行，工藝，82, 1938年3月
- (5) 柳宗悦：挿絵小註，工藝，82, 1938年3月
- (6) 浅川伯教：朝鮮の窯―谷城の窯について―，淡交，101, 1956, 引用は『浅川伯教 朝鮮古陶磁論集1』，浅川伯教・巧兄弟資料館，2017
- (7) 柳宗悦：北九州の窯を見る，西部毎日新聞，1931年7月17日～8月1日，引用は『柳宗悦全集第12巻』，筑摩書房
- (8) 柳宗悦：苗代川の黒物，工藝，41, 1934年5月
- (9) 水津智博：柳宗悦の民藝思想における「健康の美」概念の形成と展開，学習院大学人文科学論集，29, 1-31, 2020
- (10) 鈴木哲造：第14章医療・公衆衛生，日本植民地研究会編：日本植民地研究の論点，岩波書店，2018, 所収
- (11) 松本武祝：植民地期朝鮮農村における衛生・医療事業の展開―「植民地的近代性」に関する試論―，商経論叢，34(4), 1-5, 1999
- (12) 柳宗悦：朝鮮人を想ふ，読売新聞，1919年5月
- (13) 藤井恵介、早乙女雅博、角田真弓、西秋良宏編：東京大学コレクションXX 関野貞アジア踏査，東京大学出版会，2005
- (14) 関野貞：朝鮮文化の遺跡，関野貞、谷井濟一、栗山俊一：『朝鮮藝術之研究』，朝鮮総督府度支部建築所，1910, 所収
- (15) 斎藤忠：学史上における八木奘三郎の業績，斎藤忠、浅田芳朗編，日本考古学選集4 大野延太郎+八木奘三郎+和田千吉集，築地書館，1976, 所収
- (16) 八木奘三郎：韓国の美術，時事新報，1902年1月1日
- (17) 柳宗悦：李朝陶磁器の特質，白樺，13(9), 1920年4月
- (18) 梶谷崇：民藝美の基層 柳宗悦の自然概念，有島武郎研究，24, 58-69, 2021
- (19) 外村吉之介：韓国工藝の旅，続民藝遍歴，朝日新聞社，1974

〔謝辞〕本研究は JSPS 科研費（JP19K00524）の助成を受けたものである